

令和5年度第1回高砂市総合教育会議 会議録

令和5年8月24日（木）高砂市総合教育会議を高砂市役所南庁舎5階大会議室において開会

出席委員

市長	都倉	達殊
教育長	玉野	有彦
委員	吉田	美香
委員	山名	克典
委員	神尾	信作
委員	吉屋	章

出席事務局職員

総務部長	荻野	章広
総務部総務室長	吉金	仙人
総務部総務室総務課長	十倉	正佳

教育部長	木田	匠
教育部教育推進室長	福本	典子
教育部学校教育室長	矢野	仁之
教育部教育推進室教育総務課長	石原	里美
教育部学校教育室学校教育課長	福永	慎也

傍聴者

6名

本日の議事

- (1) 不登校児童・生徒への教育について
- (2) コミュニティ・スクールの現状取組について
- (3) その他

○事務局

それでは、定刻になりましたので、これより令和5年度第1回高砂市総合教育会議を開会いたします。

まず最初に、市長から御挨拶をお願いいたします。

○都倉達殊市長

皆さん、こんにちは。本日令和5年度第1回目の高砂市総合教育会議の開催に当たりまして、委員の皆様には大変お忙しい中、またお集まりいただきまして誠にありがとうございます。

改めて委員の皆様方には平素から高砂市の教育行政あるいは高砂市の子供たちの健やかな成長に御尽力を賜っておりますことにお礼を申し上げたいと思います。今年度も昨年同様、闊達な御議論をいただければと考えております。

本日の議題としましては、まず前半が不登校児童・生徒への教育について、また後半ではコミュニティ・スクールの現状取組について、皆様と御議論いただきたいと思います。その後、その他としまして、7月31日に公表されました今年度の全国学力・学習状況調査、全国学力テストの結果につきまして報告を受けてまいります。

それから、最後に、令和7年度からを期間と予定しております、次期高砂市教育振興基本計画及び高砂市教育大綱策定に対する現時点での私の考え方の一旦について述べさせていただきますので、どうぞよろしくようお願い申し上げます。

○事務局

ありがとうございました。

本日は全ての構成員の皆様にご出席いただいております。出席者の御紹介並びに事務局の出席者の紹介につきましては、出席者名簿をもって代えさせていただきます。

それでは、これから議事に入らせていただきます。

本日は、「不登校児童・生徒への教育について」、「コミュニティ・スクールの現状取組について」を議題として挙げさせていただいております。高砂市総合教育会議運営要領第4条の規定によりまして、市長が議事進行を行うこととなっておりますので、これからの進行は市長をお願いいたします。どうぞよろしくようお願いいたします。

○都倉達殊市長

それでは、次第に従いまして、議事を進めてまいります。

議題の1、不登校児童・生徒への教育についてを議題といたします。

まず、資料の説明をお願いいたします。

○矢野仁之学校教育室長

失礼します。学校教育室長の矢野です。事務局から説明をさせていただきます。

まず、不登校児童・生徒へのサポートということでお話をさせていただきます。

今日、お話させていただくことは大きく3つございます。1つ目は、今年度のサポートの現状、不登校児童・生徒へのサポートの現状です。2つ目は、令和6年度に向けたサポートの計画、そして3つ目として、具体的にその計画に基づいてどのように取組を進めるのかということでお話をさせていただきます。

高砂市の不登校児童・生徒の数の推移です。小・中学校とも平成29年度と令和3年度を比較しております。小学校においては20人から72人と大きく数が増えています。中学校も増加傾向にあります。小学校のほうの増加傾向が顕著であります。

続きまして、学校に通うことができない児童・生徒の受皿となる高砂市のびのび教室

の状況です。生石の研修センターの中のにびのび教室がございます。平成29年の通級児童・生徒数は24人で、令和3年度は31人でした。小学校の利用者数が少ない傾向にあります。小学校ちょっと保護者の送迎等で通いづらいというところもございます。中学校の別室、これは校内にある別室、今後校内サポートルームと呼んでまいりたいと考えているのですが、その利用状況です。別室のほうでは、利用した生徒が平成29年が63人、令和3年が69人となっております。

不登校の児童・生徒への支援についてです。1つ目、日頃から児童・生徒の様子を丁寧に観察したりアンケートを実施したりしまして、子供の小さな変化でも気づき、早期に対応できるようにということで努めております。2つ目、スクールカウンセラーですとかスクールソーシャルワーカー等によります相談支援を実施しています。3つ目、不登校傾向にある児童・生徒、その子、その子に応じて別室ですとかのにびのび教室などの支援の場を用意しているということでございます。4つ目、教職員が子供や保護者を支援できるように専門性を高めるための研修を実施したいと、それから担当者会ですとか生徒指導担当者会で情報交換を行ったりだとかいうふうに努めています。5つ目は、地域や保護者との連携ということで書かせていただいております。

これは、この写真、のにびのび教室の一場面です。ある日の一場面なのですけれども、それぞれやっぱり個別に机に向かって黙々と自分の課題に取り組んでいるわけですが、タブレットを持ってきている子が3人ほど見受けられます。学校のリモート授業を受けている子もおります。

ここからは、令和6年度に向けたサポートの計画について述べさせていただきます。

まず、学校や不登校児童・生徒、保護者の意見を聞きながら取組を進めてまいりたいというふうに考えております。そして、先進市町の取組から学び、今後の高砂市の施策の実施につなげていきたいと、本市教育委員会としての実施につなげていきたいと考えております。校内のサポートルームの運営や不登校特例校の設置等についても研究してまいりたいということで、川西ですとか岐阜市など、そういった先進地の研究なんかもみさせていたいただきたいということで、現地に足を運ぼうと考えております。文部科学省の「COCOLOプラン」についてもしっかりと読み込んで研究してまいりたいと思っております。

基本的な考え方ということなのですけれども、不登校というのはもうどの子供にも起こり得ることとして捉えて、そして個に応じたきめ細かな支援を行っていききたいと思っております。そして、学校や教室への復帰のみを目標とするのではなくて、その子、その子が将来の社会的自立というところを最大の目標としてしっかりと取り組んでいくということでやっていきたいと思っております。

具体的な支援の方向性です。まず、子供が通いたくなる魅力ある学校やクラス、それを作っていきたいというふうに思います。これは不登校の未然防止という意味で大事だと考えています。2つ目は、不登校をできるだけその子、その子を早期に状況を把握して、早期に支援をするということを努めていくと。3つ目としまして、不登校の子供たちの居場所づくりに努めていきます。そして、保護者さんの悩みも大変大きいので、保護者さんを支援していく、民間施設と連携していくという部分も大事にしていきたいと考えております。

これは、竜山中学校の教室の廊下にある掲示版です。暖かい掲示版です。これは、伊保南小学校の学級目標を掲示しているもの、これもクラスの暖かい目標の中でみんなですっきりやっついこうという雰囲気づくりです。

次に、ここからは令和6年度に向けて、先ほどの計画に基づいて具体的な取組ということについてお話させていただきます。じゃあ、分かりやすい授業づくりと書いているのですけれども、これはやっぱり魅力ある学校づくりにしていくためにはやっぱり学校

の中心は授業であるというところで、子供たちが何でやろうとか、へーとか、分かったとか、そういった目を輝かせる授業づくりをしっかりとやって未然防止に努めよう。それから、2つ目、子供たちが自分が必要とされる存在であるというふうに感じられるように、居場所づくりに努めていってやる気を引き出せるように努めていきたい。そして、子供は人と人との関係の中で安心もできますし成長もできるということで、子供同士をつなぐということを大切にしていきたいと考えております。

次に、早期把握ですとか早期支援に係ることです。チーム支援ができるように校内の組織づくりをしっかりと行うとともに、教師のスキルアップを図ってまいります。子供たちが安心して相談できる体制も充実させていきます。また、支援の状況をチームで丁寧に引継ぎ、進級ですとか進学に際しても変わらずサポートが続けられるようにということで取り組んで参ります。

荒井中学校で委員会の役割を決めている場面です。これは、今年度高砂小学校、高砂中学校、中学校の生徒会が中心になって合同レクリエーションを開催している場面で、大玉送りをして、もうこれは本当に子供たちも大変楽しかったというふうに言っておりました。

では、どうしても教室や学校に足が向かない子供たちのサポートについてです。別室の取組の充実につきましては、特に来年度以降しっかりと、小学校において別室の整備を進めていきたいと。冒頭申し上げましたけれども、小学校の不登校が大変増えていて、学校のほうでも対応していただいているところですので、小学校の別室整備というのは大事にしていきたいと。それから、のびのび教室につきましては、市の北部の教育センターにあるため、遠いなどの理由でそこへ通えない子供たちがいます。ですので、その子たちのために例えば市の南部の曾根地区ですとか伊保地区ですとか荒井地区の公民館等を利用したサテライト教室の開設に向けて研究検討していきたいというふうに考えています。一番下、不登校特例校につきましては、自校への登校が難しい子供たちの受皿として独自の教育課程を組んだ学校の開設に向けて研究を進めていきたいと考えているところです。

のびのび教室の子供たちが近くの山に登って遠くを眺めてのんびりする。こういう活動大好きです。それともう1つ、近くの体育館へ行って遊んで、これも子供たちは楽しみにしてこの活動のある日だけ通級人数が大幅に増えるというような傾向も見られます。

保護者支援については、面談等によって丁寧に話を聞いて、子供や保護者の状況、思いを受け止めていきたいと。それから、保護者同士が悩みを共有できる場の提供をしていけるように取り組みたいと思っております。そして、フリースクールなどの民間施設との連携ですとか、市の福祉部局等との協働支援なんかについてもしっかりと取り組んでいけたらというふうに思っております。

これは、高砂中学校の別室です。暖かい雰囲気づくりに努めております。子供たち一人一人が家に引きこもったりすることなく自分が社会で、学校で社会で必要とされる存在なんだという自信を持ち続けられるように、また保護者の皆さんも支えていけるように教育委員会としてもしっかりと取り組んでいきたいと考えております。

ありがとうございました。

#### ○都倉達殊市長

説明ありがとうございました。今度議論に入る前にこの問題につきまして私なりの考え方をまず述べさせていただければなというふうに思っております。その後、各委員の皆様から御意見をいただき、また議論できればなと考えておりますので、よろしく願います。

それと、この不登校児童・生徒への教育についてということで、私のほうから少し述

べさせていただきます。先ほど高砂市の不登校児童が増えているというような状況の数値も示させていただきます。最近、子供と家庭をめぐる問題は多様化、複雑化しておりまして、地域のつながりも希薄になる中で、安心して過ごせる場所がなく孤立してしまう子供も少なくない状況でございます。小・中学校の不登校の児童・生徒が急増しており、全国では令和3年、24万5,000人、高校生を合わせると30万人の児童・生徒が不登校になっているというような状況でございます。90日以上の不登校にもかかわらず、学校内外の専門機関等で相談、指導等を受けられない小・中学生が4万6,000人もいるということでありまして。子供たちが誰ひとり取り残されない社会を作るためには、行政、それから民間、市民が一体となった子育て支援が必要になってまいります。先ほど「COCOLOプラン」というのがありましたけど、令和5年3月31日に文部科学省の初等・中等教育局長から出された文書がありまして、その中で「COCOLOプラン」というのも研究しなさいということを示されて通達が来ております。高砂市の教育委員会といたしましても、先ほど説明がありましたように、今年度の状況を踏まえて令和6年度からの取組の説明を先ほどさせていただきます。また、国のほうでは「COCOLOプラン」の研究については文科大臣を本部長として不登校対策本部を設置し、進捗状況を管理するとともに、取組のふだんの改善を図っていく計画をされております。

まず、1つ目に、不登校の児童・生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思ったときに学べる環境を整えていくということでありまして。先ほど説明がありましたように、学校内で生徒さんが学べるような環境を整えていくようなことを考えております。

2つ目に、心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援をしていくということでありまして。やはり、不登校になるのではないかなというSOSを発信をしているような子供さん、家庭の中でも保護者の方々がそれを察知をして、学校のほうへの御相談をしていただくというようなことも大変重要になってまいります。そういった意味で学校の組織として教員だけではなくスクールカウンセラーとかいろいろな方々が連携をしながら生徒さんへの指導、対応をこれからやっていかななくてはなりません。

3番目に、学校風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にしていかななくてはなりません。そのためには、先ほども説明がありましたけど、学校を魅力ある学校にしていくということ。それと、やはり生徒さんと教員、教師との関係性がやはり信頼関係がなくてはならないということですね。家庭でのいろいろな課題、問題があっても不登校になる場合もありますけど、学校に来れない子供さん、また学校に来てくてもクラスの中に入っていけないというような状況にある子供さんに対して、どういった対応をしていくかということでございます。

高砂市では、先ほど説明させていただきましたように、のびのび教室に来る生徒さんが増加をしているような状況でもありますし、また校内のサポートルームについても増加をしているような状況であります。そういった関係で、先ほども申し上げましたように、やはり不登校児童・生徒さんへのサポートプランを先ほど説明、教育のほうでしていただきましたけど、そういった令和6年度に向けていろいろ取り組んでいこうとしておりますので、委員の皆様方からもいろいろこれから御意見をいただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

事前に「COCOLOプラン」というのは見ていただきましたでしょうか。何かこの不登校の課題について御意見ありましたら。

#### ○山名克典教育委員

不登校に対しての対応の仕方としての学校の関係だけで物事というか不登校を考えていくということはしよせん無理があるということで、やっぱりそこから始まっていくと

思うので、不登校になるのは学校が嫌いなだけじゃなくいろいろな社会的環境もあって、家庭環境もあるし、いろいろなことを含めていわゆるその兄弟の面倒を見なきゃならない。親の面倒見なきゃならない。そういうヤングケアラーみたいなものもあったりとか、あるいはその生活保護的なことでどうしても行けないとか、あるいは実際その子自体の結局その子自体の問題としての障害者であるとか、あるいは学力がついていけない。あるいはそれなりのいろいろなことがあるんですけど、それらを総合的に判断していく形で学校に不登校も考えなきゃならないし、根本として何が大事かという、先ほどの市長が言ったように、必ずしも学校に戻さなあかんということじゃなくて、結局その子の居場所、あるいはその子がどんなふうな形で社会の中にこれから自立していけるかという形のサポート体制を作っていくことが大事だと思うんですよね。それで、大筋としてその中で対応するとき、学校の中でどれだけのスタッフでどれだけのチーム学校と言いつつ、チーム学校の中で結局専門分野的な形、心理的な形、スクールカウンセラーだけではやっぱり無理だし、スクールソーシャルワーカーにしても人数の不足があったりすることもあるし、だからやはりそれを積極的にするに当たってはやっぱりそれなりの専門に行けるスタッフみたいなのがやっぱりどうしても必要になってくる。本気で行こうとすればね。やはり今のスタッフで学校の先生方にいわゆるそれはチーム学校やということ動けと言ったところで、しょせんスタッフの限界、能力の限界あるし、結局その今、別室登校とか、あるいはそののびのびに行くと専門の先生おってやけど、各学校での別室行ったところで、それはいわゆるその、本当に先生にとってそこに専任してるわけじゃないし、だから学校の中で専任でできるような形、やはりそれと社会との関わりの中でほかの健康福祉部とかというところでも関わっていけるような、それなりに特命的な形の先生がやっぱり配置されていかないと積極的になかなかいかないんじゃないかと。以前にもお話ししたことがあるんですけど、学校の中での結局教職員の結局マンパワーの不足ということがるから、それをどこまで本気で行くかという形で、この前も新聞に載っていましたが岡崎のやつがちょうどタイムリーに載ってましたけども、やっぱりそうするとそこにやはり信頼できる結局学校の中でもそれなりに教職員の中でも信頼が、保護者にも信頼がある人、その特命的な形でそれなりのそれはF組と書いてありましたけども、そういうところを担当していただいて、それになおかつSSWにしろ、あるいはスクールカウンセラーとか、ほかの方々が関わっていかなくちゃ。それと、行政もやっぱりいわゆる特に要対協でいわゆる問題になっているような形の問題とか、生活保護とか、そういう形の総合的バックアップを考えていかないと難しいのもあるので、本当に学校だけで不登校を解決していくのは若干無理があると思うので、そこをやはりどれだけ一生懸命やっていくために、市長に期待するところ非常に大きいんですけど、やはりつきっきりタイムリーに新聞に出てたように、岡崎なんかやったら市費でそれなりのF組サポーターを支援する人を雇うとか、いろいろなことをやっている。やはりそれを本気度というのがやっぱりすごく大事になって、総合的に関わらなあかんので、学校だけの話としての不登校という形の捉え方するとどうしても無理が出てきて、学校へ行かなきゃならない。行っているだけの数合わせをするための今、成果がね。表面に出てきているような形があって、学校の文部科学省の「COCOLOプラン」にしてもまだもう一つ学校へ、何せ学校へ来させよう、来させようという形のそういう意図があって、それだけでは無理だろうという。そういう特別な学校のこと作っても結局、本当はそれに地域の中でそんな数少ないもの作ったところでやはり地域の中でその子はどんなふうな形で自立していける。いわゆる不登校というかそれなりの居場所を確保できるのかということになるとプラン倒れになっても大変かなという気がしますけど。

○都倉達殊市長

山名委員がおっしゃられるように、その学校にまで来れない児童・生徒さんもおられます、今、生石のほうの教育支援センターのほうで今見ていただいたような部屋で学習をしていただいているわけですが、そこに遠くてやっぱり来れないという生徒さんもおられますので、説明がありましたようにサテライトをやはり何か所か設置をしてなるべく高砂市内の中で行きやすいような環境整備、それもしなくてははいけないし、委員がおっしゃるとおりです。どこまでするんだと。人員問題ですね。スクールカウンセラーだけでは足りないでしょうというようなお話もありますので、そのあたりにつきましては教育委員会と市長部局のほうでやはりきちっと協議をした中で、一遍にすぐ完璧なことはできないかも分かりませんが、進めてまいりたいというふうに考えておるところでございます。

○山名克典教育委員

もう1つ、すみません。1つね、こののびのび教室の在り方の問題にしても、結局その何のためののびのび教室かということを考えてほしくて、結局その子はその子の居場所を作るためのものであって、それに適応できる人はいいですが、それはあくまでいわゆる形としての根本としての流れとして、学校へ戻さなあかん形の中での教育プランを立てて、スケジュール立ててしていくような形はもう違うでしょうという形ありますよね。そういう形で違う形でやはりその子らにとって学校のミニチュアみたいな、いわゆるそのどうしても同じようなカリキュラムをこなさなきゃならないような形、それで要するに部屋に閉じ込めた形でいわゆるスケジュール、カリキュラムを組んで、そういうやり方でその子らを来なさいと言ってちょっと無理があるだろうと。だからどうしてももっともっと違う、先ほど言った魅力ある、学校も魅力あるけど結局そのサポートできるそれなりのスペース的なものももっと、いわゆるフリーにアクセスして、結局本当に強制されることのないような形でそこへ自分で行って、お友達できて、人と話できて、新たに自分でやりたいことを見つけていけるような、そういうもっとこうフランクな、結局開放されたオープンなそういうものの場所を提供したらなあかんのじゃないかと。先ほども言ったのですが、教育委員会の中でも結局言葉がいわゆる、これから別室という形の言葉変えると言ってますが、別室登校とか保健室登校とか、そういうもうネガティブなイメージのあるような、こういう形でその子らを捉えるんじゃない、いつでも来てもらえるような形での結局受入れる、来たら自由にしていいていいですよというような形の状態でもいい形での不登校、学校との兼ね合いを持っていて、自分から学校へ戻ってこれるような形をしていかないと。やはりちょっとずつでも教えていこう、教えていこうというような形の半強制的な形、今日1つの詰込み的な形のカリキュラムはやっぱりちょっときついかなという気はします。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。今、国のほうでは文科省のほうで不登校特例校の設置ということで、全国的にそういう補助金も入れながら学校のほうで行政も含めてですけど、そういう場所を特例校として設置をしていくというようなことも今、進めているような状況でありますけど、高砂市はそれがすぐにできるかどうかというのはちょっとまだ課題がありますけど、そういったことで国のほうのいろいろな施策も見ながら進めていきたいなというふうに思っております。

ほかの方で。吉田委員。

○吉田美香教育委員

私もその登校をしない子供の理由というのを一人一人あまりに違い過ぎるので、私が知っている数名の方でもみんな理由が違うのですね。子供によってはその夜中までY o u T u b eを見て朝起きられない。で、昼夜逆転しているために登校できないとかいうお子さんもいれば、本当に学校で嫌なことがあるので行けないと思ったら、そのやっぱり分かってないだけでどこか身体的にトラブルがあって、普通のお子さんが当たり前に行けることがちょっときつっていうお子さんも、周りの大人がちょっとまだ気づいてなかったときにはやっぱり不登校になってたというような、全然違うのですね。一人一人。だからそれをまずきちんと見極めてから、じゃあこのお子さんの場合はこうしたほうがいいのかよっていう対応は一人一人していかなくちゃいけないと思うので、それを丁寧にしない限り解決しないと思うのですね。そうするとやっぱりそれだけマンパワーがいる。人がいる。それから、やっぱり経験のあるきちんとした人、子供のことを第一に考えてくれる人がいるということで、ここのところがやっぱり行政と一緒に力を合わせて地域も力を合わせていろいろな人が関わってということが必要になるのかなと。まずその原因をもっと、本当に真剣に、一人一人に向き合っていくことをしなくちゃいけないんじゃないかというのを感じているのと、もう1つは、私たちの価値観を押しつけないようにしないと、何か学校行っているのが当たり前という世代ですから、私たちは。ですから、そうじゃなくて、その子が最終的に大人になってある年齢になったときに、まあそこそこいい人生だったなと思ってくれるような生き方をしてくれれば、方法ってどうあってもいいと思うんですね。そこまで大人がまず割り切らなくちゃいけないし、その子に本当にいい学びというのが学校なのかどうかというのが分からないんですよ。ですから、そこまでちょっとこっちも頭をもっともっと柔らかくして対応しなくちゃいけないと。すごく感じたのは、Y o u T u b e rの人の言葉で、中高生が非常にそれに感銘を受けたという言葉がありましてね。その教室というのは電車の、1つの列車の何号車という号車と一緒に。たまたまいろいろな理由があってその列車に偶然居合わせて一緒にそこに座っている。だから、何もそこで仲良くなったりいい関係を作る必要はないんだと。だけど、みんな大人になったらちゃんと黙って席について目的地までおとなしく誰にも迷惑かけずにいるでしょうって。だから、そういうふうじゃなくちゃいけないのよ、大人はっていうことをY o u T u b e rが話してたって。それに非常に中高生が感銘を受けたと言うんですね。だから、それぐらい感覚が私たちと違うんだなと。お友達になろうとか仲良くなろうとか何か1つになろうとか、そういうことが非常に負担になる人が多いんだなというのを感じましたし、だから何かその私たちの価値観を大きく変えていかないと、多分あの子たちが本当に求めるものというのには対応できないんじゃないかなと思っていて、難しいなと感じています。

以上です。

○都倉達殊市長

吉田委員がおっしゃったように、一人一人理由は違うと思います。そこのカウンセリングをどうしていくかという問題と、やはりその教育、学校へ行くことが全てじゃない。どこかの場所で通信教育的な授業を、映像を流すこともできますので、そういったことでの対応ができることの環境整備もやらなくてはいけないし、今、不登校になる原因として高砂市の教育委員会のほうではやはり家庭環境の問題であるとか、体調不良、それから学力の不振、それと友人関係が一番大きな要因ですかね。そういったことで内容はそれぞれ違いますので、そのその保護者の方々、それと御本人、生徒さん、それと学校との、それと地域の方がどう関わっていくかというのがこれからの取り組んでいく大切なことかなというふうに思っております。



#### ○吉屋章教育委員

この「C O C O L Oプラン」の三本柱の1つ目なのですが、不登校の児童・生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思ったときに学べる環境を整える。これが私、やっぱり一番大事だと思っております。我々教育委員でふだん議論していますのでね。大体重複してしまうのですが、結局不登校をなくすとか減らすとか、これは表向きもちろん大事なことでね。魅力ある学校づくり、魅力のある授業とかね。その辺は努力していかなとあかなとは思いますが、もう今は学校に行かなあかなのかというような議論がなされている時代で、もちろんその子たちをほったらかすようなことでは駄目なのですが、そういったところが行政主導でしっかりとサポートができていれば、果たして枠組みの中で学校で授業を受けなあかなのかということも結構言われています、民間とかN P Oのそういうフリースクールとかね。そういうものが充実していたらなのですが、そういうところで市長いかがですか。その学校別に行きたくなくて子供があまりストレスを感じて負担を抱えて無理してそこに通う。それやったらもう行かないでいいやないかと私なんかは思うのですが、市長、どうですか。それが1点と、もう1つは、そのそれにはやっぱりそれなりに環境を整えてあげなければならないのですが、学校に行けない、不登校の子供たちの。その中でやっぱりICTというのは大きな力になると思うのですね。せっかくタブレットを1人1台与えていますのでね。それを利用してそちらを学力の向上という使い方、これはもちろんなのですが、不登校の子供たちに対してのそのICTの機器の使い方というところがもう力の入れようね。私もそこでいろいろなことができるんじゃないかなと思うのですが、その辺のICTをどんどんもっと活用していくということになるともちろんお金もかかりますしね。その辺は行政、市長のその考えが大きく左右してくると思うのですが、その2点ちょっと、市長のお考えをお聞かせいただきたいのです。

#### ○都倉達殊市長

1つ目のその不登校になった原因はいろいろあるわけですが、やはり学校に必ず行かなくてはいけないということをその生徒さんに押しつけていくようなことはしたらいけないと思うのですね。やはり寄り添ってあげないと、やはりいろいろなことがあってその生徒さんは悩んでいるし、また勉強も遅れていることによって悪循環になっているような状況がありますので、そこはきっちりサポートしていくという体制でやっていきたいというふうに考えています。どういった形が一番その子にとっていいのかというのを考えていかななくてはいけないかなというふうに思っています。

それとやはり、タブレットをどう活用していくかというのはやはり予算のかかることかもしれませんが、こういうふうにG I G Aスクール構想が始まってもう数年経っていますし、小・中学生も大分慣れてもきておりますので、学校側とやはり生徒さんをつなぐツールとしての役割を担っていくというのは大切なことですし、そこにこういった形の学力が低下しないように提供していくかというのはやはり学校現場と家庭とのつなぎ方、それをやはりこれから進めていかななくてはいけないかというふうに思っています。

#### ○神尾信作教育委員

不登校というのはもちろん新しいようで古い大きな問題だと思います。私、2つに分けて考えるべきかなと思ってきた。というのは、不登校にならないための対策と、もう1つは不登校になってしまった対策というふうに思います。先ほどのパワーポイントにもその両方が説明されていたと思うのですが、私なりにまとめると、まず不登校になら

ないためには学校でできることということで限定すると、やはり授業とあと学級担任の力がとても大事だと思っているのです。で、子供たちが1日学校において授業がほとんどの時間を占めて、あと休み時間とか給食の時間は学級担任が主に担当するわけでしょうけども、そこで不登校になりそうな子供がそういうふうにならないためには、例えば授業では魅力ある授業とか分かりやすい授業とかいうふうにフォーカスされていますけども、それをもうちょっと細かく言うと、どんな意見、間違っただ意見が出ててもそれを嘲笑しない、冷笑しない。そういうクラス、雰囲気。それから発表できない子供がいてもそれを認める雰囲気。特に新学習要領では主体的・対話的で深い学びという言葉を使っているのです。それを思うと、その対話的というのはグループになって小集団作って活動するわけですね。それは絶対苦手な子いるんですよ。僕もそうです。こうやってしゃべるのあまり好きじゃないし、だから子供が、あ、そうそう。僕ら講演会行っても今日はしゃべるばかりで面白い講演会やったら良かったと思うんだけど、途中でじゃあグループ分けしましょうと言われて、この前もあったのですが、教育委員会だけ集まってやってください。えっとドキドキしながら入るのですよね。ですから、当然そういう子供たちがたくさんいるのに、その主体的で対話的というこの対話的を取り上げてしまうと、今主にグループ活動をやっている、すごいね、すごいねってなっているけど、それはすごいんだけど、それを嫌がる子供がいるという視点を教師が持っていないと、これは学校ではその不登校生をちょっと醸成しているような部分があるかなと思うんですよ。ですから、その辺をもう一遍教育現場が、教師が考えて細かく見る。先ほど市長さんから小さなSOSという言葉ありましたけども、それを見る。そういう教師の目。それとあとまた結局介助員さんとかスクールカウンセラーさんとかいつもお願いしているそのマンパワーですね。その話につながってしまうのですが、やっぱりそういうできるだけ多くのそういう大人の目があれば、この子はちょっとそういうのを嫌がっているよ。ちょっと最近元気ないよというのをちょっと見つけてくれることが大事かなと。たまたま今日、今朝の新聞で神戸新聞に、教育業務支援員倍増って、文科省が外部人材、今日出ていましたね。これは国や県の施策になるのでしょうかけども、また市のほうでもそういうスクールサポートスタッフのことなのですけども、これは教師の担任の業務をアシストしてくれる人でしょうけども、もっと教室の中に入ってふだんの子供のちょっとした違う目を見つけてくれる。そういうマンパワーも欲しいなと思います。

あと、不登校生になってしまったときはもう、先ほどからも重複なのであまり言いませんけども、私の知っている不登校担当者もやはり3人、5人、自分が不登校、別室、今でいう校内サポートルームを担当している教師がいて、彼らの話を聞くと、やっぱりもう原因がもう様々で、そのたった3人、5人でもどういうふうに接していいか非常に難しい。話しかけてやったらいいのか、話しかけないほうがいいのか。中にはずっと1日中、半日ずっと本読んでいる。もうそれ話しかけると次来ないみたいなのとかね。ですから、その辺の細かいところで随分苦労しているのだけど、それでもそこでちゃんとしていけば学級に復帰できる。ただ、学級復帰が目的ではないのですけどね。これも先ほどから何回も出ていますが、となるとのびのび教室とかのいろいろな連携が必要かなと思います。

もう1点最後に、不登校のことを通して全体的に思うことなのですけども、ちょうど1週間前に吉田委員さんも一緒やったのですが、県の全体の教育委員会の研修会があって、そのとき平田オリザさん、豊岡市の。あの人が新しい学校観、学力観ということで講義をされました。その中で、冒頭おっしゃった言葉でね。コロナ禍以降、保護者も子供も学校に対する価値観がもう薄くなった。変わった。何かというと、コロナで

学校に行くという、学校に行かなければならないというハードルが低くなって、もう休んでもいいよということが普通になってきたから、だから学校に行くという情報とか知識が得られると思っていたのはコロナの前で、今は学校に行かなくても普通にそれが得られる。先ほど吉屋さんがおっしゃったようなことにつながると思うのですが、ですから、学校への価値観、学力への価値観が今はもうコロナ前と後では変わっているから、だからそこは学校現場がしっかりして意識しないと駄目ですよ。国も復帰する、学校に登園する登校するのが最終目標じゃない。いろいろなところがあるというふうにそれを認めているわけだから、その辺はやめたほうがいいのかなどということを知りたいのですが、これもつい先日の新聞か何かで、国が不登校生が学校復帰をしなくてもいいんだよ。違うところに行ってもいいんだよということを知っている保護者は、その不登校生を抱えた不登校生を持っている保護者が知っているのは6割しかいない。そういう報道がつい先日ありました。4割は知らない。で、その6割の方に、その方にじゃあもしそれを知ってたら今と同じ、要するに学校復帰というルートを選びますかと尋ねたら、7割の人がそれ以外を多分選んだと思いますというふうに回答しているのですよね。ですから、こういうことが情報としてなかなか伝わっていない部分があるので、それをどんどんいろいろ情報発信して、正しい選択ができるようなことをしていかなければいけないのかなと今、思います。

○都倉達殊市長

今、神尾委員から現場の担任の先生方の対応とかいろいろなちょっと現場の話も出たので、ちょっと教育長のほうから。

○玉野有彦教育長

はい。学校に行っているのが当たり前やと私も思っている世代の人間だったのですが、ただそういうのもちょっと少なくしつつも、学校の存在意義って何よって考えて行ってしまうのです。じゃあ、学校って何よっていうふうな究極のところまで行っちゃうのですけども、そう考えたときにやっぱり学校に来てもらいたいという、教育に携わっていたのももらいたい。そのためには何かというと、学校の大事さはやっぱり人間関係づくりができるところかな。それとか自分というのはいいんだと思えるようにしていくところかなというふうなことをやっぱり原点に持って、学校教育を進めていかなあかん。そのために神尾先生言われたような、どの子にもチャンネル合わせていけるような教員づくりも必要かなというふうなことを思います。とかく、学校の先生は学校においでよってつい言うってしまうのですけども、それが負担になってしまう子もいる。そういうようないろいろな意識を持っている子供たちもいるよっていうことを再度先生方に言っていかなあかんっていうふうなことを思うのです。先生悪気ないのですよ。本当に子供のためにとって思っているんやけども、そこら辺の価値観をちょっと変えていく必要があるなというふうなことをお話を伺っていて思いました。それは私ら教育委員会の仕事かなということだと思います。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。一人一人御意見いただきましたので、この件について私のほうで総括的にちょっとお話をさせていただいて次に行きたいと思えます。

それぞれの委員の方々から御意見いただきましたように、やはり私も同じなのですが、子供たちが学校本当は行きたいんだけどいろいろな理由で不登校になっていった生徒さんがいるということ、学校側と保護者さんとやはりカウンセラー、いろいろな方がやはり関わって、その生徒さんのやはり環境づくりも含めて内面も含めてやはり聞い

てあげた中で対応を考えていくというところと、やはり今現在教育センター1カ所で対応しているのと、学校内では別の部屋で学習をしていただいている。その辺をやはり市としてどこまでどういう環境整備を、予算もかかりますけど進めていくかということをやはりきちっと考えながらやっていく必要があるのかなというふうに思います。不登校の数字を減らすだけではなく、やはりその問題をどういう問題解決をしていくかということが一番大事だというふうに思いますので、教育委員会とやはりきちっといろいろな情報収集しながらこれから進めてまいりたいというふうに思います。

それでは、次に議題の2に行かせていただきます。コミュニティ・スクールの現状の取組についてを議題といたします。

資料の説明をお願いいたします。

#### ○矢野仁之学校教育室長

それでは、地域とともにある学校づくりの取組について御説明をいたします。

3つに分けてまたお話をさせていただきます。初めに、今年度の前半の取組です。次に、今年度の後半の取組予定、最後に、これからの取組についてお話をさせていただきます。

これは北浜小学校の2年生が、地域の人々の支援を受けてサツマイモの収穫をしている場面です。これは米田小学校2年生の九九暗唱ボランティアです。約30人今はクラスにいますのでけれども、その子供たちの九九の暗唱を1人の担任が全部聞いていたら大変なのですけれども、こうやってボランティアさん入っていただくと大変助かります。

今年度前半の取組です。4月に学校の管理職と運営協議会委員の代表の方に集まらせていただきまして連絡会を行いました。運営協議会の役割ですとか活動内容について説明をしました。5月には自治会連合PTA、子ども会、婦人会等の会合に出向かせていただいて、学校運営協議会の取組内容について説明させていただき、協力をお願いいたしました。4月から7月にかけては、小・中学校の全ての運営協議会開催されたその会合に出向きまして、パワーポイントで取組内容を説明してまいりました。8月の広報たかさごで広く市民の皆様にも学校運営協議会の取組を紹介いたしました。

8月4日には教職員、学校運営協議会委員の皆様、そして地域の方々など409の方に御参集いただきまして、フォーラムを開催しました。フォーラムの感想ですけれども、地域の方々の声の中には、学校の実践がすばらしかったですとか、それから持続可能なものとするためには市としても人的、金銭的支援がいるのではないですかというような御連絡もいただいております。教師のほうも、学校運営協議会というものの意義を再確認しまして、学校と地域が話し合いを重ねて取組を進めていくということの大事さを感じて、そしてそれを今後やっていこうという前向きな意見もたくさん教師が寄せておりました。

これは、フォーラムの一場面です。文部科学省のコミュニティ・スクールマイスターの方を講師としてお迎えしまして、高砂市の取組発表2つ発表があったのですが、それに対して御指導ですとか御助言をいただきました。

今年度下期の活動の予定です。各学校の運営協議会が動き出してはおるのですけれども、始まったばかりの実践ですので、今後もまだまだ連絡会を開いたり、それからいろいろなことをサポートしたりしながら教育委員会としても取組が進んでいくように努めていきたいと思っております。各学校の運営協議会につきましては、指導主事が必ず参加しまして指導や助言、支援というふうなことで深まりのある活動となるようにしていきたいと考えています。

これは、荒井中学校の夏祭りのお手伝いの様子です。これ小・中学校のクリーンアップキャンペーンということで、生徒も一緒に頑張っている様子です。

最後になりますけれども、次年度以降の継続した取組についてです。各学校で運営協議会の取組状況をきちんと評価しまして、評価点検しまして、今後の取組、これは継続していくべきやなとか、これ改善せなあかんでとか、これもう辞めてもええんちゃうかとか、そういったことについても話し合いをして、どんどんやっていきたいというふうに思いますし、それから現在、学校運営協議会設置要綱によって高砂市の学校運営協議会制度は運営しているのですけれども、今後は学校運営協議会規則の作成に取り組んでいきたいと。そして、コミュニティ・スクールというふうになっていくようにというふうに取り組を進めてまいりたいと考えております。また、学校運営協議会の活動に必要な経費などを予算計上しまして、持続可能な取組としていけるように努めていきたいと思っております。各学校の特色ある取組をより強化して、学校と地域が一体となって高砂の未来を担う人材育成に資する取組、そういったものをいっぱい行って、活動を続けていきたいというふうに思っております。

説明は以上です。

#### ○都倉達殊市長

ありがとうございました。この議題の2につきましても、私のほうから私の考え方についてちょっと述べさせていただきます。

コミュニティ・スクールというのは、学校運営協議会を設置をした学校のことでありまして、学校と保護者や地域の方々とのみんなが知恵を出し合って学校運営について一緒に協働をしながら、子供たちの豊かな成長を支えて進めていくことであります。地域と一体となって特色のある学校づくりを行っていくということで、学校教育を持続可能なものにするための仕組みであると考えております。現在の学校や子供たちが抱えている課題やそれぞれの方々々が役割を果たしていただき、教育の環境を整備することが求められています。そのためには、地域や保護者の方々々が当事者意識を高めていただき、学校運営に積極的に参画していただくことが重要ではないかなというふうに思います。

それと併せて、教職員の方々もやはり地域連携に関わるいろいろな研修であるとかそういう機会を設けて、やはりその学校の生徒さん、それと地域の方々、その教員と併せて校長先生がトップとしてその学校運営協議会の中でいろいろな基本的な学校運営のことについても協議会の中で協議をしていただきながら、学校側のほうにいろいろ意見として挙げていただくというのが最終的にはコミュニティ・スクールということになるのではないかなというふうに考えております。

それにつきまして、各委員の方々から御意見をいただきたいと思いますが、よろしくお願いいたします。

#### ○山名克典教育委員

この学校運営協議会、コミュニティ・スクールの構想としてはおおむね賛成としてはしているのですけれども、結局地域の中の学校の在り方、学校を中心にその地域が一体化していわゆる子供も見守っていこう。あるいはそれなりの人材育成もいろいろしていこう。地域を活性化していこうと。そういう構想はすごくいいのですが、すごくやっぱりこの今現在の中でのいわゆる働き方改革の中でこの学校への期待のあまりにも、何でも学校、学校と言って学校が全部中心で動いたらそれがうまくいきそうな構想を持っている懸念が僕はあって、結局学校に過大な負担をかけていつているんじゃないかなという。これ持続可能という言葉使われますけど、持続可能な状態でこれ本当に続くんだらうかという僕は懸念をしているのですよ。結局学校の先生に対して今でもどンドンどン、先ほどの不登校の問題にせよ、いろいろなことで学校の先生方の働き方の問題で非常に過度ないわゆるオーバーワーク的なことがやっている。いろいろなことのクラブ

活動の問題にせよ、トータルの課題、それをさらにこの中での地域の中でのこのままにして、実際中学校に対してそれどうですかという、やっぱり今は新任の校長先生なんかはすごく積極的にやりたい。非常にうまくいっているとかいうことを表明されますけど、本当に大丈夫ですかという。そのいわゆる入れ込みがきつくてこれやっていったって先生の任期の間に2、3年の間にどれだけの効果があるかは分かりませんが、それでバックアップしている地域の方々が、そういった方は長くおってやから見えていくわけではないですけど、やめていくわけではないですから続いていくのだろうとは思って、その校長が変わっていったりしてもうまくいくかも分からへんけど、やはりいろいろな授業の、学校の授業のいわゆる積み重ね、いわゆるどんだんどんだん重ねて重ねて増やすばかりのことで捨てる、やめていく授業というのはやっぱりもっと大きくしていかないと。無駄なことはやめていこう、そういう学校の運営というものも考えていかないと。プラスアルファで何でもかんでも足して行って、地域のためにいいからいいから言って連携今まで過去のやられていたところはやっぱり取捨選択して、やはり切り捨てるものは切り捨てる。そういう形で新たな関係に持っていかないとやっぱりオーバーワークになって、先生方への負担がきつくなる。だから、今先ほど言われました、今年からのそういう教育業務支援の配置とかありますけど、それと同じようにこれも結局その地域との中の連携をするときにはやっぱり副校長的な形の方がやはり担っていくような形。校長に全てを担わせるような形、教頭だけ、それだけ本当にスタッフ足りているのかなという。そういうもうちょっと学校側に負担がかかっていないのだろうかという目線でこれを、流れとしてはいいプランだとしても、学校側も先ほど言った取捨選択してやれることとやれないことをきちんと選択して、スリムになって結局もっと本当にいいことだけをやっているっていいんじゃないか。何でもかんでも取り込んでやらなきゃならないという発想をちょっと一回考え直してみてもいいんじゃないかなという気はしているので、今後こういうのをどんなふうな形で進んでいくのかなということで思っていますけど。

#### ○都倉達殊市長

ありがとうございます。私は学校運営協議会はやはりこの学校にいろいろなあれしてほしい、これしてほしいという提案もあるかも分からないですけど、逆にですね。地域の方々、PTAの方々も含めてですけど、やはりいろいろな地域の方々がサポートを、学校側のいろいろなことをサポートしましょうという連携がまずあって、いろいろなことが解決していくという仕組みづくりをやっていかないとですね。学校側にあれしてよ、これしてよっていうと、今度学校のほうもたなくなってしまうので、そこはやはりその地域の方々がどういったことがお手伝いできるのかということも御相談をしながら学校運営協議会の中でいろいろ御意見を交わしていただいて進めていくというのが一番いいのかなというふうに思っています。

吉田委員。

#### ○吉田美香教育委員

私はもうこれかなり軌道に乗り始めている学校なんかがありますので、いろいろな活動をどんどん展開している学校がありますよね。そういう学校もあればこれからこうやってやってみようかなということもありますし、これが後数年後になるとすごくその学校によって方向性が変わってくると思うのです。持っていく方向が。そうなる前にその市としての方針、大きな方針というのを一つ持っておかないと、各学校が好きな方向に進み出すということもどうなんだろうというのはちょっと懸念しております。やっぱりどうしても大人同士の話になって、学校の先生方と、それから地域の大人たちとという

ことで物事が進んでしまうと、じゃあ主演の子供にとってどうなんだろうとか、子供はどう感じているのだろうかとか、子供にできることはとかいうところはどうしても抜け落ち始めるのかなということも少し感じていまして、やっぱりせっかくなのでいろいろな世代、お互いの価値をもう一回再認識するような場になってくれればと思いますので、子供の存在というのはすごい、特に高齢の方にとっては元気をもらおうとかね。いろいろあるみたいですし、そしてやっぱり中学生というのはその地域で一番体力も気力もある世代です。高校になると出ていっちゃいますから、その子たちの頼もしさとか、力強さとか、あの子たち頼りになるね。いてくれてよかったねみたいな思いとか、そういうものはもう子供たちに聞かせてあげてほしいとか、そうすると子供たちも自分ってこんなに人を幸せにできるんだとか、こんなに役に立つんだということを知ってくれると思うのですね。そしたら、ただその部活で体鍛えているというのではなくて、いざのときにはこれでお祖母ちゃん背負って走れるでみたいな感覚を持って頑張ってくれればいかなと思いますので、何かそういうお互いの価値観を認識できるような何か方向性というのを、市で一つ大きなものを持ってもいいかな。そういう感じでそれぞれの活動を考えてみてよみたいな。どうですかみたいな感じのことをちょっと教育長さんにも言ったりしています。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。じゃあ、玉野教育長、ちょっと教育長としてのその方針的なことがありましたら。

○玉野有彦教育長

令和3年、4年と準備をしたというのですけども、令和5年度から新設されてやっている取組ですので、本当によちよち歩きのような事業なのです。だから、その吉田委員さんが言われるように、ある程度の規則を決めてやっていくように取り組んでいきたいなことを思っています。ただ、早急にいいように変えていこうとするときっとひずみが来ると思うのです。やってはこの活動駄目やったなって取壊したり、それから学校負担ないとか、地域しんどくないとかいうような意見も交わしながら、その運営協議会で交わしながらやっていかなあかんと思うのです。どんどんどんどん行ったらひずみがあって、山名委員言われるようにちょっと働き方、学校もしんどくなってしまうし、地域もちょっとこんなことしてくれへんの学校、というような声も出てくると思うので、ちょっとゆっくりと上がっていききたいというふうに私は思うので、地域に出向いていろいろなことしていますかとか、学校の先生しんどくないですかということを聞きながら進めていきたいなというようなことを思います。

それと、やっぱり子供の声というのは大事なので、生徒会が提案に入るとかいうのも面白いなというようなことを思いました。ありがとうございます。

○都倉達殊市長

ありがとうございます。  
神尾委員、何か。

○神尾信作教育委員

これ情報提供みたいなことになると思うのですけども、先ほどちょっと触れました先週にあった全県の教育委員会研修会の後、グループ討議があって、そのときに同席した他市の件なのですけども、尼崎市の教育委員の方は学校運営協議会のメンバーについて、学校評議員とあまり変わっていませんと。本市でもあまり変わっていないところもある

のですけども、同じようなメンバーが学校評議員としてやっていますというようなことでした。ですから、組織はできているんだけど、まだ具体的な取組はまだできていない状態ですと。あと、ふるさと学も力を入れています。これも私のところも高砂学ということでふるさとで活動をやったりしていますみたいなことを言ったのですけども、尼崎ですから近松門左衛門をやっていますと。ただ、近松門左衛門はテーマが心中ものが多いと。それは大変ですから、地域の方に近松門左衛門をやってもらうのだけども、テーマがテーマなのでちょっと気を遣いながら選んでやっていますというようなお話でした。あと、本市が高砂型学校運営協議会という形で高砂型というのをやっていますと。それは何が違うかということ、問題になった。問題になったというのは言い方が悪いかもしれませんが、教職員の任用に関する申出ができるという部分とっていますというお話をしました。そうすると、宝塚市のこの方は教育長さんでしたけども、その方がうちも発足当時は同じようにやっていました。ただ、2年前に市長さんが女性の方に変わられて、そのタイミングでその宝塚市型というのをやめて、国の形でやっていますと。今、だから2年前からそうやっていますということ。あと、丹波篠山市もうちと一緒に教員の任用に関する分についてはカットして運用を今やっていますと。そんなお話がありましたので、お伝えいたします。

#### ○都倉達殊市長

ありがとうございます。各地域でいろいろな取組をされていますので、やはり高砂市としてもやはり自分のところだけで物事を完結するんじゃないで、やはり他地域がどうしているのかということも参考にしながら物事を進めていくということが大変重要やと思っています。

吉屋さん。

#### ○吉屋章教育委員

私も運営協議会のメンバーということで地元でやらせていただいているのですけども、とにかく今、吉田委員言われたようにね。地域によってはもう実際に動き出して先ほど紹介ありましたように子供たちの九九見てあげたりね。放課後の宿題見てあげたり、そういうボランティアが自然と集まって動き出しているところもあるのですけども、結局全体として何していいか分からへんというのがやっぱり大きいのです。もちろん説明も来ていただいて、このコミュニティ・スクールという制度であったりね。これがうまいこといったときの意義みたいなものは十分理解できるんですよ。じゃあ、具体的に私らはこのメンバーで今から何していったらいいんだというところが分からなくて、教育長が言われたようによちよちよちよち、もちろんよちよちで慌てることはないのですけど、よちよち過ぎる思うんですね。ずっとよちよちで何にも進んでいかへんような、これから2年、3年たっていくんちゃうんかってね。自分がやっていますね。不安なところがあります思うのですが、だからやっぱり吉田委員言われたように、何かこうちょっと1つの枠組みで、これをしてくださいみたいな。もうちょっと踏み込んで教育委員会や行政のほうから地域のほうに依頼してほしいと思うのです。その中で、例えばですね。その支援、市が運営協議会自体支援するという形の、人材発掘何か市のほうからやっていたきたいと思って。この教育の分野だけじゃないけども、やっぱり地域と行政との連携というのは非常にどの分野においても私弱いと思うのです。特にこの教育に関してはね。地域との連携一番大事です。それがなければこのコミュニティ・スクールなんかできませんのでね。そが一番大事なのですけども、学校の校長先生が地域の中からその地域の重鎮と言われる方ね。その人が悪いわけじゃないのですけどもね。そういう方を選んでいくのも限界がありますのでね。やっぱり行政の視点でね。いろいろなところから



年代も交えてこの地域にはこういう人がいるみたいなことも分かると思うのです。その辺をちょっと行政で人材発掘チームみたいなのを市長、作っていただきたいのですが、作っていただきたいじゃない。作りませんか。一緒に。私らも仲間よけますけど。そういう形で、とにかくやっぱり人やと思うのです。この運営協議会は。その地区にその核になる人がいれば、その地区それぞれの統一することはね。する必要ないと思いますけど、それぞれの動きがずっと出てくると思うのですが、やっぱりその辺がちょっと今問題で、歩いていたらいいのですがね。よちよちでも。止まっているような気がするのです。どう思います。

#### ○都倉達殊市長

おっしゃるとおりで、評議員会のお話もありましたけど、この学校運営協議会というのが進めていくためには、やはり人材発掘だと思うのですね。今まで評議員されていた方が当然入っていただかなくても入ってほしい方もおられますし、入れ替わってほしい方、逆に若い世代の方々もやはり参画をしていただいて、やはり学校に対する地域の方々がどういう思いを持っているのか。また、いろいろな考え方がそれぞれ違いますので、やはり学校のその運営のやり方をやはりいろいろな御意見を出していただきながらそこにその協働としてのまとめ方を運営協議会の中でいろいろな議論をしながら進めていっていただきたいというふうに思います。これはやはりずっと将来にわたって続けていかなくてはいけないし、地域コミュニティをいかにつくっていくかというのが今、やはりどこの市も求められていますから、やはり少子化という問題は避けられないですけど、やはり子供たちをやはり宝として見て、やはり地域がどういうふうに子供たちを育てていくかというのを、一緒になって考えながらやっていきたいというふうに思います。

教育長、どうぞ。

#### ○玉野有彦教育長

人のことなのですけども、こんな活動したいなという場合は、もう学校教育課にまずどんな人がおると言ってもらったら。活動を支援する方はあっせんすることはできると思います。ただ、その地域の人のことです。これは私の経験からなのですが、地域ずっとこう自転車で回っていて、この人やったらっていう人を見つけていきました。それとか、会社のほうに行ったら何かこう会社で会社の服着ている人にちょっと何しているんですかって声かけてみたりして、それが校長冥利に尽きたのですがね。私はね。そういうことを今、管理職しんどいんですけども、そういうことをして実働隊を作っていくのがとても大事なときやと思うので、もし吉屋委員と一緒に自転車で回れと言ったら回りますので。

#### ○吉屋章教育委員

私も自転車ですね。本当にね、それもその思いがなかったらなかなか難しいのですが、例えばボランティアでもね。今、米田とかね。北浜とか高砂とかでもね。ボランティアの方来られています。それはもう市のほうから募集してもらおうとかね。その入り口としてね。で、あなた、募集してきてくれた方、あなたはこの地域やからという形で、例えば運営協議会にその方を紹介していただくとかね。それも1つの人材発掘の支援の方法です。自転車で一人一人探していくのもいいのですがね。

#### ○玉野有彦教育長

生涯学習的に見ると、そういうふうなことがあるのですが、それをやっちゃうと

いいところもあるし、ちよっとうちの地区でこんなんやったからやってみいひんになって、崩れていく場合もあるので、その辺は地域の運営協議会で十分協議していただいたらありがたいかなというふうには思うのですが、吉屋委員のメンバー、仲間というのを見たときに、大丈夫と思いますので、今はもうよちよち、止まっている状態かもしれへんけど、きっと動き出すと思います。どうぞよろしくお願いします。

#### ○都倉達殊市長

ありがとうございました。それでは、私のほうでこのコミュニティ・スクールの現状についての総括的なちよっとお話させていただきます。やはりこれは学校をやはり地域とともにある学校にしていかなくてはいけないということだと思っております。そこにはやはり今、各校区の中でもう朝登校時に子供たちの見守りをやっていたりしている方もおられるわけですが、やはりそういうこともそうだし、これからやはり学校だけじゃなく地域にもいろいろな課題があります。そこにやはりその周りを取り組むためには地域コミュニティをどう作っていくかということが大事だから、やはりそのこの学校運営協議会を通じて、また学校だけではなく、この地域全体のいろいろな課題解決を一緒になって進めていくということで、結果としてやはりいろいろな世代間交流もできるし、また子供たちのその安全、また教育を含めて関わっていただくようなことができればですね。一番ハッピーではないかなというふうに思いますね。

それでは、次の議題3といたしまして、冒頭挨拶の中でも言いましたように、今年度の全国学力・学習状況調査の結果につきまして報告をいただきたいと思っております。

#### ○事務局

学校教育担当です。令和5年度の全国学力・学習状況調査における高砂市の平均正答率について報告いたします。

実施学年は、小学校が6年生、中学校が3年生でした。小学校では、全国の平均正答率と比べて、国語は同程度、算数は上回るという結果でした。中学校では、国語・数学・英語のいずれも全国平均を下回るという結果でした。簡単になりますけども、説明は以上です。

#### ○都倉達殊市長

ありがとうございました。この点につきましては、議題としては上げていないこともありますので、ここでは報告ということでお願いをいたします。この件につきましては、次回総合教育会議での議論とさせていただきますので、どうぞよろしくお願いたします。

続きまして、その他として私のほうから令和7年度からを期間と予定をしております次期高砂市教育振興基本計画及び高砂市教育大綱策定に対する現時点での私の考え方の一端を述べさせていただきますというふうに思います。

現在、第3期高砂市教育基本計画は、令和6年度末で期間を終えることとなるため、来年度から第4期高砂市教育基本計画の策定に向かって教育部のほうで事務を進めていくと聞いております。この次期高砂市教育振興基本計画策定に合わせて高砂市教育大綱につきましても改訂を予定しております。高砂市教育振興基本計画に掲げる教育目標や、施策の根本となる方針を高砂市教育大綱としたいと考えているところでございます。今後開催される総合教育会議において次期高砂市教育振興基本計画の骨子案の段階から私の教育に対する考えをお伝えをし、第5次高砂市総合計画の将来像を実現するため、次期高砂市教育振興基本計画及び高砂市教育大綱の策定に向けて、皆様方とともに協議調整を行ってまいりたいというふうに考えております。今後ともどうぞよろしくお願

たします。

それでは、教育長のほうから次期高砂市教育振興基本計画策定につきまして何かありましたよろしく願いいたします。

○玉野有彦教育長

まず、高砂市のものを作るということに当たりましては、市長のお考えになられる高砂市の総合計画を基に、それから、国と県の教育振興基本計画を参酌しながら作っていかねばいけないなということを思っています。国のところでは学び続ける人材とか、共生社会とか、地域や家庭とともに支え合う社会の実現とか、DXとか、計画実行とか言われているのですが、高砂市のいいところも生かしながら、例えば自然とか、それとか文化伝統とか、産業とかいうのも入れながらやっていきたいな。作っていききたいなということを思っていますが、本当にその曖昧で変動して不確実で本当にその複雑な世の中になってくるので、さて10年スパンじゃなくてもいいかなみたいなことも考えたりもしています。もう変わっていく世の中ですので5年ぐらいなのかなというようなことと、それとやっぱりこの正解を求めていく時代ではなくなってきたので、自分で課題を見つけてそれに向かって自分の答えを作っていくような力を作っていくような子供たちを作っていきたいなということを今、ぼやっと考えています。

以上です。

○都倉達殊市長

今、教育長のほうからそういった考え方を述べていただきましたけど、委員の方々に何か質問なり御意見ございましたら。

○山名克典教育委員

市長のそれなりの思い、今日のその不登校のこととか、あるいはこの前から言われている特別支援に関してのいろいろ思い入れというのをすごく感じているのですが、やはりただちょっと予算の上づけをはっきりもうちょっと目に見えた形でやっていただきたいと思えます。それでやはり形のある、いわゆる高砂の教育はここがいわゆるすごくいい。高砂の教育はやっぱりここ他市よりも進んでいるなという形の、ある程度市長なりのそのプランニング、いわゆるその施策、全面に出されて思われていることを施策で出されて、要するにいろいろ僕らにどうでしょうということを言っていたら、僕らはそれに協力しますし、それに対してのやっぱりお答えとして予算を伴った形で特別支援にせよ、いろいろな不登校にせよ、教育のことに関しての上づけを期待していますので、本当に。きつく言いますけども。

○都倉達殊市長

いえいえ。ありがとうございます。玉野教育長とも将来に向けて高砂市の教育をどうしていくかというようなことで、週1回私の部屋でいろいろ意見交換する時間を教育長のほうで飛び込んでいただいていますので、いろいろな話が進めていけるかなというふうに私自身も同い年でちょうど意見も合うかなというところもありますし、今、学力調査、試験の結果も発表しましたが、私はやはり教育というのは子供たち、生徒が興味を持ってもらうのと、楽しんで学ぶことができた結果はおのずと出てくると思うのですね。やはりもうだんだん嫌やな、嫌やなと思いついたら、学ぶ力が湧かなくなるじゃないですか。そこにやはり学校現場だけじゃなく、一人一人の生徒さんがやはり何かに興味持ったらやはりそれを集中してやってもいいし、何もかも全てをね。学ぶことがいいのかどうかということも思っています。だから、いろいろな自由研究、夏休み

なんか特に子供たちは自由研究していますけど、本当に自分がやりたいなという、研究したいなということに飛びついてそれをやったら、もう真剣にやっていますよね。やらされた感でやっていると何かもういいかなというふうに、嫌々やっていることもあるのですが、学校の教育の中でもやはり各学年によっても違うと思うのですが、生徒さんがやはり楽しく学ぶ環境づくりを学校現場で作っていけたら、おのずと成績はついてくるのかなというふうに思っていますので、教育長ともやはりいろいろなことについて議論しながら、高砂市の教育ということを進めていきたいというふうに思っています。

○吉田美香教育委員

私も山名先生とかぶるかもしれませんが、やっぱり将来に高砂市が本当にどんどん先細りになることだけはどうしても避けたいなという思いを強く持っていますので、やっぱり大事にしてもらったところは子供って戻って来ますから、自分の子供を育てるときに、やっぱり自分が大事にされたところへ戻ります。ですから、やっぱり子供に手厚くしていただきたい。やっぱり手厚くっていうとやっぱりお金大事ですから、子供のために手厚く予算をとっていただいて、そしていろいろな環境の子がいますけど、地域や市はあなたのこと大事に思っているよっていうメッセージが伝わるのが大事だと思うのですね。そうしたらきっと帰ってきてくれると思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

○都倉達殊市長

私も就任以来、中学校3年生、各中学校に出向いているのですが、今年度、昨年度はちょっと学校のいろいろな行事関係で行けなかった学校もありますけど、本当に行く子供たちが、わー、市長さん来てくれたんやあって言って、すごい歓迎をしてくれてまして、1時間授業終わった後、すごい私自身が思っているのかもしれませんが、ああ、良かったなというふうに思います。そこにはやはり中学校3年生のときにやはり地域のことをやはり勉強する。また、学校で学んでいない内容を私がしゃべることによって、また違うところに着目してくれるようなことが少しでもあればすごいいいことしているのかなというふうに、自画自賛ですけど思っていますので、これは学校側からの要請に基づいてやっていますので、続けていければなというふうに思います。

吉屋さん、何かありますか。

○吉屋章教育委員

大丈夫です。

○都倉達殊市長

大丈夫ですか。それでは、いいですか。

○神尾信作教育委員

1つだけいいですか。先ほども全国学力・学習状況調査の結果のみお伝えいただいたのですが、私は中学校の国語教えて、国語が低い、下回っているのが現実なのですが、その部分だけがポッと出てしまうと、やはりやっぱり低かったんやなという思いを持ちながら、そのやっぱり発表とすれば全体的なところの中で見ていただかないと、その結果、小学校の国語は同程度、あとは算数は上回った、中学校は国数英全部下回ったということであれば、まあそれは厳しい現実ではあるのだけれども、そこだけで終わってしまったら何か順位だとかその結果のみに何か我々がとらわれている感じを持ったので、ちょっとそれはどうなのかなとちょっと感じました。

以上です。

○都倉達殊市長

どうぞ、教育長。

○玉野有彦教育長

神尾委員が言われるように、やっぱり数値だけでやっちゃうと、先生方の努力、子供たちが頑張っている様子が全然もう消えちゃうので、そこら辺はどうやって、どのようにしてこうなったのかというのを分析していきながら、皆さんに公表していきたいなということを思います。中学校なんか教科担当者会で集まっているいろいろ工夫してくださっていますし、なかなか頑張っているんだけども、ちょっと何かうまく応えられなかったような状況になって、それと、数値で表される部分もあるんだけども、やっぱり非認知的な能力がやっぱり大事だと思うのですよ。粘り強さとかコミュニケーション力とか、そのあたりも子供たちの質問紙調査を基にしながらちょっと引き出していって、経年比較の中からよさを捉えたり、課題を捉えていきたいなというようなことを思います。

○神尾信作教育委員

よろしく申し上げます。

○都倉達殊市長

ありがとうございました。

それでは、本日の議題につきましては以上となります。ありがとうございました。

それでは、進行を事務局のほうにお渡しします。

○事務局

本日の議題はこれで全て終了しました。

これをもちまして、令和5年度第1回高砂市総合教育会議を閉会いたします。

どうもありがとうございました。